

著書紹介

「食文化雑学」 原語から考えるホントの語源

著者:松崎 修 出版社:文芸社:2015.6 ¥1,200(税抜き)

この本は、主として日常食べている食品の語源説で、疑問なものを取り上げ、ホントの語源を探究したことを、エッセイ風にまとめたものです。

“豆腐になぜ「腐」を”のように、中国で豆腐ができた時代の状況や中国語で考えないとホントの語源が分からないことが多いと思います。

中国では「腐」には柔らかいという意味がある”とか、ぶよぶよしたもの云う、とか明らかに違うと思われる語源説が、立派な著書、大辞典等に出ており、ネット上でもこれを書いている語源サイトも多くあります。

この本は、「誰が正しい」ではなく「何が正しい」ということを基本に、異なる説には、論拠を示しております。

本では主に、中国から渡来した食品に関係する項目を取り上げております。以下、本の主な項目ごとに、その概略を書きました。

読者の皆さんがまだ気が付いていない発見もあると思います。

楽しく読んでいただければ幸いです。



本は、書店で購入できます。右のブック通販でも購入できます。

(「食文化雑学」で検索してみてください。)

書籍を購入

amazon.co.jp e-hon 楽天ブックス
Tnet shopping ブックサービス Honya Club
紀伊國屋書店

NO.	項目名	内容の概略
1	へちまの語源	糸瓜が何故かへちまと呼ばれています。室町時代に中国から渡来したものです。1595年の羅葡日対訳辞書に日本語でhechima no tagui とポルトガル語のローマ字で出ています。また、1604年の日葡辞書にはhechimaがあり「ひょうたん科植物の仲間であつたのだ」とあります。1612年の多識編に「糸瓜:俗名へちま」と糸瓜が初出しました。へちまの語源を、江戸中期の物類呼称に「と瓜と略して、とは「へとちの間であるから」へちまという、とありますが、変ですね。その200年前にhechimaとあるのです。本書では、渡来当初から他の食品と入れ違っていた、という新説を、述べています。
2	へちま野郎は誤解	ぐうたら、のらくら者がへちま野郎と言われますが、へちまにはその謂れがないのです。1595年の羅葡日対訳辞書にラテン語のCucumberの意味の中に、へちまとうつわ者(うつけ者)があるのです。うつわ者とへちまと結びつけてしまったようです。
3	ちまちま	“ちまちましたことを言うな”などといいますが、「ちまちま」の語源が分かっていないようです。中国語辞書の「捨了芝麻(ゴマ)捨了西瓜」とあり、“ゴマ(細かいもの拾っていて、大きなスイカを見逃すな”という諺です。ゴマ(胡麻)の一般名は「芝麻」チマです。“ちまちましたこと”とは細かいこと、ホントの語源はこれでしょう。
4	薬をたべるという	中国では、薬をのむことは「吃薬」で、ご飯を食べることを「吃飯」と言いますから、薬を食べると表現していることとなります。これを中国語特有の言い方と受け止められています。が、中国では文字のうえで、飲む、食べるの区別がないのです。飲み水を「吃水」といいます。吃は喫茶の「喫」の略字ですから、日本では“コーヒーを食べる”といっていることになり、この議論はあまり意味の無いことです。
5	りんごを漢字で書くと	りんごは中国から伝わり林檎という漢字になっていました。明治の初めにアメリカから大きなりんごが渡って来ました。中国では苹果(ピングォ)としましたが、日本では、そのまま「りんご」で、漢字は苹果も使っていましたが、現在では林檎になっています。林檎も苹果も、りんごと読めないのに何故りんごか? ホントの語源を述べています。
6	ハッカの語源	中国語で「薄荷」と書きます。ハッカは葉からメントールを抽出するとき、大量のハッカの葉からできるメントールはわずかで、荷が軽くてすむから薄荷と、ネット語源記事にあります。中国語で考えると全く意味が違ふのです。

NO.	項目名	内容の概略
7	胡瓜と黄瓜	「黄瓜」は、熟すと黄色になるから黄瓜ではないのです。また黄色になってから食べるからでもないのです。黄帝、黄河、黄山、黄酒、黄豆(大豆)と同じように、中国を代表するな意味のあいの「黄」なのです。そのいきさつを調べました。
8	文旦とザボン	戦後「長崎のザボン売り」という歌がありました。このザボンは現在の文旦と似た種類のもので、古くは朱欒(しゅらん)の釈明がザボンとなっていました。このザボンの語源はどんな本、辞典、図鑑でも、判で押したように「語源はポルトガル語のZamboa」とあります。が、どんな葡日辞書でZamboaを引いても、「混血児」「がにまたの人」しか出てきません。筆者は、このZamboaと云われたことを推理し、正しいと思う語源を示しています。
9	食でも縁起を担ぐ	中国での一匹の煮魚を食べる時、魚を裏返すのは、「転倒」につながり縁起が悪く、魚を裏返すのはタブーであることを書いています。
10	饅頭と羊羹	饅頭は三国志演義(1370年)に出てきます。蜀の諸葛孔明が生贄(いけにえ)の代わりに牛馬の肉を麵粉でこねて、人の頭の形を作り、生贄に使ったのです。これを「饅頭」と呼んだとあります。しかし、よく考えると納得いかないのです。孔明が饅頭を作ったのは225年で、その時代は麵粉を使った食べ物は「餅」と呼んでいたのです。その真相は？ 羊羹(ようかん)は中国から伝わったものです。羹(かん)は、肉と野菜とを煮た羹(あつもの)のことです。「ようかん」になぜ羊(やぎ、ひつじ)が出てくるのか？固まっているのは何故か？などを解説しています。
11	弁当を持たない文化	中国では、弁当をもって出掛ける習慣がないです。冷えたものは身体によくない、ということで再加熱して食べるからです。その代わり、どこに行っても店や屋台があり、温かい物が食べられるようになっていきます。日本も手弁当派が少なくなりました。
12	ポン酢の語源	料理、食卓でお馴染みのポン酢です。この語源がオランダ語のPonsであるという説に異論を述べています。どうしてオランダ語が出てこなければならないのか？江戸時代はポン酢という言葉もなかった。疑問ばかりです。昭和39年ミツカン社から、初めて出たポン酢の語源がオランダ語とは思えません。 中国・台湾で柚桤酢(ゆず桤)、桤柑(ぼんかん)で作ったポン酢が売っています。ホントの語源はどうか？
13	ジャガイモと馬鈴薯	馬鈴薯は中国語です。イモが馬鈴(主人が家に帰ってきたことが分かるように馬に付ける鈴)に似ているから、そう命名したのです。 ジャガイモは馬鈴薯とは全く違うものだ、と主張した日本の学者がいたのですが、馬鈴薯で問題ないことを詳しく説明しています。
14	餃子と鶏のから揚げ	「餃子」は中国から伝わって明治時代には、チャオツと中語語読みでした。戦後になりギョウザに変わったのです。これは満州から引き揚げた方々が広めたのです。 満州語で「餃子」をギョウズ、ギョウザと発音したのです。 また、中国で何故「餃子」と命名されたか、そのいきさつ等を調べ、解説しています。 鶏のから揚げ、日本のから揚げが中国で人気があることを紹介し、中国のから揚げ「炸鶏」との違いを紹介しています。
15	ハマグリとゼンナ	上総(九十九里浜)の方言でハマグリをゼンナという、どうしてゼンナか？江戸時代から上総等の方言で蛤(ハマグリ)を“ゼンナという”とありますが、語源が分からないのです。いろいろ考え推測してみました。 上総(九十九里浜)の漁業は紀州の漁民により確立されたという史実があることからその語源が、関西方言的な言い方が元になっているものと、推定しています。
16	焼酎の話	中国では焼酒といいますが、強い酒で飲むと焼ける様だから焼酎としたのではありません。焼は煮るという意味で蒸留を意味しています。日本での「酎」の意味は？ また、「泥酔」という言葉があります。漢和辞典に「海底に住むドロという虫が泥にまみれると正体が分からなくなる、正体を失うほど酔うのを泥酔という」とありますが、疑問です。 中国語での「泥酔」の語源を紹介しています。中国の古い辞書で「泥」を引くと、一般的にドロの意味と、「泥は軟弱」とあります。身体が軟弱になるまで酔うのを泥酔ということでしょう。日本で、「泥のように眠っている」とも言います。身体が軟弱になる程熟睡していること。ホントの語源です。

NO.	項目名	内容の概略
17	パンとぶどう酒	パンの語源をみると、必ずポルトガル語のPAO(パオ)とあります。大変疑問です。食文化の書物では、この時代は「波牟・ぱむ」と呼んだとあります。パンに近いです。信長の時代にキリストの布教を赦しました。ポルトガルが呼んだ宣教師、ザビエルはスペイン人だったのです。スペイン語のPAN(パン)がホントの語源だと思います。PAOは中国語のパン:包(パオ)の語源となっています。
18	本場四川の担担麵	日本で、「本場四川の担々麵」という看板をよく見ます。中国、四川最初出たのは汁なしの、ミートソースのような麵でしたが、すぐ、他の店より売れるように工夫し、多種類化するのです。「本場四川の担々麵」とは汁あり？汁なし？本場でも色々な担々麵があります。本場～～と云う言い方は難しいと思います。
19	食あたり	食中毒にかかることを“食あたり”といいます。食中毒の中の意味を御存じない方が多いのでは、と思います。百発百中の中、命中の中での“あたる(中の意味の一つ)です。
20	桃栗三年柿八年	この続きの一例を書いておきます。桃栗三年柿八年----- 最後は、“達磨(ダルマ)九年で我一生”で結ばれています。知っていれば役に立つことがあると思います。
21	豆腐に何故「腐」を	豆腐の語源説を見ると、中国では腐は柔らかいという意味もあるという。が、どんな辞書を見てもありません。また、腐という文字は府には倉という意味もあり、肉を倉に入れておけば柔らかくなるから腐という字になったとも、立派なホームページにあります。肉を倉に入れておけば“くさる”から腐ではと思いますが。 中国の杏仁腐、魚腐(ハンペン・練り物)、腐皮(ゆば)等の腐は豆腐の腐を略して使っているだけで、腐に柔らかいという意味があるなどと言えません。 ブルンブルンしたものの、ぶよぶよしたものに、柔らかく弾力のあるものを腐という。とも多くの書物にありますが、論外です。 何故豆腐と命名したかは、中国語で、かつ中国の当時(推定6～8世紀?)の社会状況も加味して考えなければなりません。種々の検討で筆者なりの結論を導いています。
22	豆腐の起源	中国で、豆腐はいつごろ出来たかは、既に中国及び日本の学者・先生方が論じております。が、書いてみたくなりました。というのは、納得がいかないからです。 中国で打虎亭漢墓で発見された画像石の中に「豆腐製造工程図」があり、前漢の時代に豆腐が造られていたことが否定できないとしています。しかしこれに反論する学者もおり、筆者も論拠を示し反論しています。画像石の「豆腐製造工程図」は「醸造の工程」の図だと思います。
23	豆腐の異名	江戸時代の「豆腐百珍」は、豆腐を使った料理集です。この本の後の方に書かれている豆腐の異名(菽乳、豆乳、淮南佳品、小宰羊、黎祁)の意味について解説を試みました。
24	油でもないのに何故「醤油」か	しょうゆは中国から「醤油」として伝わったものです。醤油は大豆の醬(ひしお)から搾り、とろりと流れる液体だから醤油と名づけたと(油はとろりと流れる液体のことと説明している)業界の公式ホームページにあります。しかし、醤油はさらりと流れると思いませんか？ 筆者は、油という文字のルーツを探し当て、反論しております。 中国では、油の含んだ液体も「～油」としています。豆醬のたまり、搾り汁は「醤油」と、蝦(エビ)醬の上に分離した液を「蝦油」としているのです。
25	蕎麦やうどんを何故「打つ」という	蕎麦やうどんを打つという言いいます。最近では手打ちパスタなども出ております。この動作に打つということが無いのに、～を打つというのは生活のいろいろなところで出てきます(寝返りを打つ、水を打つ--等々)。。蕎麦を打つも同じ様に、中国語の「打」+名詞で動詞にする用法、たとえば麵を作ることを「打麵」、餅を作ることを「打餅」と言います。日本に伝わって、～～を打つ、という言い方になったのです。
26	急須の話	急須(きゅうす)の語源をネットや著書で見てもよく分かりません。正鵠を射たような説がないのです。急須は中国語にあります。辞書で引くと、「小茶壺」とあります。 日本では中国東南部でのキビショウ(急焼)が急須にあたるとしています。違ふと思います。また、ネット等にある、来客等で、必要になったときに急いで用(須)を足せるから急須、ではないのです。筆者は急と須の出所を探し、語源の新説を書いています。